

結果1：いずれの学習目標に対して評価観点の変更がある。
 結果2：評価基準の変更により、大多数の学習者は、評価観点変更の方に多めに目を向けていた。
 結果3：各学習目標に対して、学習者の間に評価観点の変更率の差が大きかった。

結果1より学習者は自身の学習状態に応じて、メタ認知認識の吟味という学習活動が行われたことが確認できた。結果2より研修を通じて看護思考スキルの理解が進んだことで、思考観点として記述された文章の意味をより深く考えるようになったと推測する。また、学習者のメタ認知的認識を得る方針に即した学習環境が提供されたといえる。結果3よりメタ認知的認識の吟味とメタ認知的認識の調整学習活動のどちらかしか行われていなかったために、学習者のメタ認識に関する学習環境が提供されたといえる。

6.3. 評価基準の変更についての考察

受講生の評価基準の変更値（1回目と2回目と比較）を学習目標ごとに平均化する際、平均化により差がでなくなることを避けるため、評定値の差の絶対値について平均化した結果を表4に示す。

表4 評価基準の変更率と標準偏差

学習目標（スキル）	1回目	1回目 SD	2回目	2回目 SD	平均値の差
葛藤の超越	4.479	0.806	4.908	0.736	0.429
ベースレベ思考とその表現	4.730	0.962	5.050	0.650	0.720
思考のモニタリング	3.583	0.607	4.250	0.692	0.667
思考のコントロール	3.900	0.953	4.163	0.927	0.263
自己調整学習	4.186	0.427	4.329	0.512	0.286

表4から、下記の結果が認められた。

結果4：受講生全員に評価基準の変更が認められた。
 結果5：約4割について評価基準の変更が上昇した。
 結果6：全体的に評価基準の変更が上昇傾向だが、その差は大きくなかった。

結果4から、いずれの学習目標に対して、メタ認知的認識を調整する学習活動が行われたことを確認できた。結果5から、学習者が過去の思考に対して過小評価をしたことが、上昇方向への変更が多かった理由と考えられる。

結果5と6から、評価基準が甘くなった受講生は、過去の思考に対して過小評価したと推測する。一方、研修を遂行達成目標として認識してしまい、研修で

の学習による看護思考スキルの成長を評価したと推測できる。

7. まとめ

患者中心の医療サービスチームを支える看護思考スキルの育成に着目し、看護師が日々の看護業務の中で、看護思考スキルについての学びを継続する動機付けを高める学習支援の構成を明らかにして、看護思考スキル自己調整学習促進手法を構築し実施した。その結果、学習者は看護思考スキルに対する認識の更新を行ったことが確認され、さらに、評価基準この更新から、学習者が、看護思考スキルの更新経験を通じて、看護思考スキルに対するメタ認知的認識を吟味調節することで、新たなメタ認知的認識が得られたという学習者の成長と推測する。そのため、本研究で提案した看護思考スキルの学習支援手法が、学習者に看護思考スキルに対する自己調整学習への認識を促すことに有効で、学習者が看護現場に戻ってから、看護思考スキルを経験から学び続けることを期待できる。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP25282054, JP26560118, JP18H01051 の助成を受けた。

参考文献

- [1] 三宮真智子: メタ認知—学習力を支える高次認知機能, 北大路書房, pp. 17-36, (2008)
- [2] 自己調整学習研究会: 理論と実践の新しい展開へ, 北大路書房, pp3-29(2012)
- [3] 経験学習, 看護管理, 医学書院, pp264-296(2017)
- [4] Kolb, Experiential Learning-Experience as the Source of Learning and Development, pp.66-76 (2015)